
その手のぬくもりを

御影 玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その手のぬくもりを

【Nコード】

N7540J

【作者名】

御影 玉

【あらすじ】

福原恵太

関村薫

過去に付き合っていた男女が、長い年月を経て偶然再会する
運命の再会はあまりにもせつなかった…

再会（前書き）

友人の依頼で作成したもので、脚本ばく書おります

生と死を組み込まず、感動する作品を作れるか…との挑戦で作るに至りました

各々の台詞や主人公の心の声からこの物語の背景を各人で想像して頂けたらなと思います

再会

通行人女性 「課長」

恵太 ふりかえる

通行人女性 「待って下さい。早いですよ歩くの」

恵太 通行人の女性と課長と呼ばれる男性を見ている

恵太 失笑しながら「俺はもう課長じゃないんだな」と寂しそうに

頭を触る

そのままあてもなく歩き、公園のベンチに腰かける
そしてしばらくぼーっと座っている

恵太 「・・・生きている意味がわからないな」

そうつぶやきうなだれている

目の前を女性を通ったのにも気付かず、ただただう

なだれる

通りすぎようとしたとき、顔をあげる

なつかしい匂いがした・・・

せつなくて、甘くて、何度も抱きしめた女性の匂い

恵太が昔愛した女性を通りすぎたのだった

そして、この公園が彼女とよく来た公園だったこと

最後の瞬間もこの場所で迎えた事を思い出す

仕事一筋で、公園でたたずむこともなかった

別れてから、足をとめる事もなかった思い出の公園

に知らず

知らずのうちに足を向けていた事に気付く

恵太

小さい声で『かおる！？』と呟く

薫
げ、

振り返り、耳をすますが、わからないのか首をかし
気のせいねと少し微笑みながら去ろうとする

恵太
た自分に

あまりに歳月がたち、今やリストラにあいおちぶれ
気付かないのかと落胆する・・・が、目を伏せたそ
の先に

薫の杖が見える

薫が杖をつきながら歩いているのに気付く
その姿が気になり、様子を見てみると、薫の目が見
えない事に

気付く

そして、薫の落とし物に気付き、思わず声をかける

恵太
なりながら

『あのつ、楽譜・・・落としましたよ』なぜか敬語に

薫

『あつ、すみません。』と微笑む

恵太

近づき、そつと渡す

薫

『ありがとうございます。これがないと困りました。
助かりました』

恵太 「いえっ、」

薫 「じゃあ、失礼します」

恵太 いきかける薫に恵太は思わず声をかける

恵太 「あのっ、」

薫 「？」首をかしげながら

恵太 「一緒に歩きましょうか？」

薫 「・・・あっ、ご親切に有難うございます。
丁寧にお辞儀をする」

薫 「大丈夫ですので、お気になさらないで下さい。
では急ぎますので・・・」

恵太 声をかけれず、ただ見送る
そして公園のベンチに座り、考える

現在

あれは、確かに薫。でも自分の知っている薫とは違う
薫は、服装も今より全然派手だったし、化粧もバッチ
リメイクで

茶髪だった

ミニスカートをはいても、足をかくすロングスカートを
はくことはなかった

そんな薫が、今は髪は黒く、化粧もナチュラルメイク
で控え目で

服装もどちらかというと地味で目立たなく

そして何より視力を失っている

自分と気付かれなかったのはショックだが、姿も見え
ず、

声は長年の労働でかれはてて、自分とわかれというのが
無理だろう

わかったところで、今の自分を見たら、薫じゃなくて

も、
落胆するだろう

今の自分を見られたかったか？そんなわけがない
目の見えない薫の現状に少しホッとした自分がいた
髪には白髪もまざり、無精髭、びしつと決めてたスー

ツは
しわしわ

クビになってから、意味もなく町をさまよい、バリバリ

働いていた頃の面影すらない

とは言っても薫がバリバリ働く自分を想像できることもないのだが…

より

薫と付き合っていた頃は、まだ働きだした頃で、仕事

の男だった

薫といたい、薫にとってただの都合のいい優しいだけ

た、誰から

だから、薫に会うことがあるなら、課長と呼ばれてい

も尊敬される男としての自分を見せつけてやりたかった

最初はそのためだけに、がむしゃらに仕事をして、薫

を忘れる

ためにのしあがった

それがだんだん、やればやるほど成果の出る営業に没

頭し、

人を蹴落としながら、人を使って働く事に快感を覚え、

仕事一筋の毎日だった

をあっさり

それなのに、たった1回の商談ミスで、会社は、自分

切り捨て、若い野心にあふれる後輩に課長を任せ、そ

いつの

サポートにまわるように指示をしてきた

事実上、「君は必要ない」と言われたようなものだった

とだった

それは、自分がのしあがる為に、散々人してきたことが、自分がやられるようになるとは思ってもみなかった

てると

それぐらい、自分に自信もあつたし、誰よりも上にた
自負していた

上で

自分が会社にとって必要ないと知り、そのことで、路
見ず知らずの男と喧嘩になり、警察を呼ばれ、気がつ

けば、

会社に席はなかった

ける

そんな自分の現状を受け入れられず、次の仕事を見つ
こともなく、毎日スーツを着て、ビジネス街をうろつ

き・・・

そして、今日薫に会った

あんなに変った薫だったのに
自分が愛していた薫とは全然違う薫なのに
薫が頭から離れない

だと、

そのぐらい薫は自分にとって大きな存在の女だったの
年月がたった今更再確認だ

恵太

『・・・会うのが遅いよ・・・薫・・・』
ボソッとベンチに座りながら呟く

記憶

恵太

そして、それから毎日、薫に会えるかもしれないと思い、その公園に足を向ける

知る

そのうちに、毎週水曜日に薫がその公園を通ることを公園の近くでピアノのレッスンをしていることがわかる

よく薫と二人、歌ったものだ

薫がピアノを得意気に弾くのを傍で聞いていた

『私、ピアニストになるのよ』

自信ありげに薫はよく言っていた

見かけは

視力を失ってから、ピアノを続けていた事を知り、
変ってもピアノに情熱を傾ける姿は変わってないんだな

と思う

で、

ただ、薫は、派手好きだったから、付き合いも大好き
よく嫉妬して、喧嘩になってその度に薫から別れを言

われた

そして、ある日いつものように

ら、

『そんなに薫に疲れたんなら、別れたげる。さようなら、
恵太は何もわかってない』

薫の決まり文句に

『わかってるよ、薫の事は俺が一番、わかってる、
薫が好きだから俺だけの薫がいいんだよ』

いつもの自分の決まり文句が出てこなくて、思わず

『疲れたよ。わかった。さよならだ』

言ってしまった

すると薫は一瞬こわばった顔をしたが、すぐ涼しげな

顔になり

『さようなら。恵太さんも自由だね』

と去っていった

どうしてそんなことをいったのか、自分でもわからな
く、
何度も後悔して連絡をとろうとしたけれど、

一度だけかけてみたかった

男として薫が、どれだけ自分を見てくれているのか、

必要としてくれてるのか

だから自分から連絡はせず、待った

来る日も来る日も待ったけど、薫からの連絡はなく、
薫のことを封印する事に決めた

そして仕事にあけくれる

そして現在にいたるわけだ

仕事を失ったら、また薫、薫か・・・
笑えるなと自分に嘲笑いながら・・・

虚映

そして、ある日、また以前のように薫が譜面を落として
行く

恵太 『あの、落としましたよ』

薫 『あつ、すみません。ありがとうございます』

手渡す恵太に薫が

薫 『・・・この前も拾って下さった方ですか？』と切り出す

恵太 『・・・』

薫 『すみません、変な人と思われたでしょうね。
シャンプーの匂いと同じでしたからつい、すみません』

そこからだった、薫と恵との出会いは
そこ

何回か挨拶を交わすというか、声をかけるうちに、
薫と面識がある人になった

でもどうしても、恵太だと名乗れず、恵をめぐみとよんで、

名乗った

薫は苗字と思ったらしく、恵さんとおっしゃるの？

何をなさっているの？と聞くから、思わず課長と答えた

ら・・・

薫は恵課長さんとは自分の事を呼ぶようになった

見えない薫についた嘘

でも恵太だなんて言えない

自分が恵太だと知ったら、薫がどんな反応をしめすか恐かった

『恵ちゃんなの？なあんだ』と言われるのが恐かったのかも

しれない

何もなかったかのように、笑顔で久しぶりねと言われる

のが
恐かった

だから、毎週水曜日薫の前では「恵課長」になる

演じた自分がいつの間にか薫に、バリバリ一線で働いて

いた頃の

話ばかりをしていた

くれた

薫は恵課長さんはすごいんですねと黙ってずっと聞いて

薫を見返す為に、がむしゃらに働いた過去の栄光を

今の自分が語るのは辛かったが、あんなにやる気をなく

し、

生きていくのに疲れてたのが嘘のように、薫との一時が

退屈な毎日の特効薬となった

ように

毎週薫と会う、水曜日が楽しみで楽しみで待ち焦がれる

なった

と実感した

そして会ううちに自分が今も昔も変わらず薫を愛している

でも、どうしても失明したことを聞けずにいた

薫の今はあまり知らなくて、薫は自分の話はいいから、

恵課長さんの話を聞かせて下さい、楽しいですと

自分の事を話したからなかったからだ

最初は気になったが、今は現在の薫に興味があり、

なかった

そんな薫に好意を抱いている自分がいることを否定でき

やはり自分には薫しかない

薫の為にもう一度働いて、もう一度頑張ってみたい

日に日にそんな思いが強くなり、薫と会う日以外は、
再就職活動もした

けた

そして、小さな会社だが、一から営業をする仕事を見つ

なった

新しい一步を踏み出すにあたり、
そんな自分の傍に薫がいてくれたらなと強く思うように

今日は薫に付き合って欲しいと告げよう

そして薫が受け入れてくれたら、

その時は自分が恵太だと名乗ろう

受け入れてくれたなら・・・

恵太と名乗ろう・・・

名乗りたい、恵太だと・・・

告白

恵太

『薫さん。今日はお話があります』

薫

『なんですか？あらたまつて』

恵太

『薫さん、僕が今まであなたに話してきた事は、
実は…過去の僕の栄光物語にすぎませんでした。
僕は、会社に命を捧げるくらい、がむしゃらに
働いてきましたが、リストラをされました。
そして、人生に悲観している時に、あなたに会ったの
です』

薫

黙って聞いている

薫

恵太

『あなたに会って、話するようになり、
自分の過去を今のように語って、
最低な男と思われるかもしれません。
でも、あなたに話している時だけ、
僕は昔の自分に戻れて、すごく幸せでした。』

そして、話をするうちに、もう一度
頑張ってみたいという気持ちが湧いてきました。
恥ずかしながら、前の会社には全然及びませんが、
小さな出版会社の営業をする事がまりました。
僕がもう一度人生のどん底から這いあがれたのも、
あなたのおかげです。
僕と一緒に、…人生を歩いてみませんか？
僕に君の目の代わりをさせて下さい」

薫
とまどいながら「恵課長さん？」

恵太
「すみません、嘘をついていて…
しかもいきなり…
付き合ってもらいたいつもりが
プロポーズのようになってしまい…
でも、僕の嘘偽りない本当の気持ちです。」

そういつて、薫の言葉を待つ

静かに静かに時が流れる

告白を告げてドキドキはすなのに、
恵太はなぜか穏やかな気持ちだった

じつと薫が耳を傾けてくれていたことに、
何故か居心地の良さを感じてさえた

そして、言葉を口にして、前より
もっともっと薫を好きになった

薫を心から支えたい
そして傍で支えて欲しいと強く思うようになった

薫

『・・・恵課長さん、

お気持ちは本当に嬉しいです。

本当にこんな盲目の私が、

誰かに思いを寄せられるなんて

こんな奇跡ないでしょうね。

あなたが、本気でそうおっしゃってくれているのも

あなたが優しく、仕事熱心な方なのも

あなたと、ここでお話をさせて頂き

痛いほどわかっております。

そして…

きつとあなたとなら

楽しい毎日が待っていることも・・・』

恵太

『絶対楽しいですよ』

薫

『・・・でも、

私はあなたと共に人生を歩むわけにはいきません』

真実

恵太

『どうしてですか？』

薫が意を決意して話し出すまで静かな時が流れる

薫

『・・・私、以前は目が見えていました。

どこにでもいる普通の女の子で普通に暮らしていました。た。

恋人もいたりなんかして・・・。

でも、私・・・決して自慢できるようないい彼女じゃなかったんです。

彼を心配させるような行動や言動ばかり・・・

彼はいつもそんな私を見守ってくれて、

いつも惜しめない愛を注いでくれました

だから、私・・・彼が、私の手を離す事なんかないって
たかをくくっていたんです

いつものように、わがままな私は決まり文句のように
彼を挑発して、別れを告げたんです

最低でしょ・・・（哀しく微笑みながら）

本当にささえないことで、いつものように・・・

（昔を思い出ししみじみながら・・・）

彼が絶対別れを受け入れることなんかないって
信じきっていたんですね

勝手ですよ。本当に勝手・・・

彼は・・・・・・疲れたと別れを受け入れました

私は信じれなくて、すぐごめんねと言ってくるだろう

と、思っ

簡単にさよならを告げました

家に帰って、電話を待ちました

次の日も待ちました

1週間待ちました

1ヶ月・・・

そして、ある日、朝目覚めていつものように目をあけたのですが、

二度と明りを見ることはできなくなっていました

いつも真っ暗で・・・

最初訳がわからなくて、夢なのかなって

彼が連絡をよこさないのも夢なのかなって

そして、もうすぐ彼が連絡をよこしたら、きっと朝になるんだって

毎日夜だけれど、その時きつと目覚めるんだって

悪い夢を見るだけだって

・・・自分が視力を失ってること、いえ、彼を失った

事実を

受け入れられなかったんです

初めて、彼を失った大きさ・・・に気付きました・・・

もう、待っても彼は迎えにはきてくれないんだって

真っ暗な毎日なのに、涙はでるんですね

枯れるくらい泣いて

目が見えないのよりも、彼がない事に

そんな現実が受け入れられなかった

何度も何度も生きている意味を問いました

何度も何度も

なぜ存在しているのだろう

どうして、私は今ここにいるの

真っ暗な世界でいつもいつても何かに追われいました

逃げ惑いもがく自分が彼を呼び、彼の手を求め、そして、

暗い世界に吸いこまれていく
彼は彼は、もう私の傍にいません

めました
でも、私はその現実を受け止めて生きていくことを決

めました
彼にした、彼にしてきた、彼の苦しみに比べたら今の
私なんかって

って
私が背負って生きる為に彼がプレゼントしてくれたんだ
誰かを愛していた。私も誰かを本気で愛していたとい

う感情に

気付かせてくれた

彼が気付かせてくれたから

あのままの昔の傲慢な私なら一生気付く事なんてなか
ったでしょう

だから、自分の十字架を背負って生きようって

・・・それにね、あつかましいし、

こんな私なんか重荷になるだけなのに・・・

まだ、私彼を・・・愛してるんです

まだ、彼を何処かで待ってるんです

彼が、手を差しのべてくれた時に、私、真っ暗い世界
から

卒業できるんじゃないかなんて
夢見たいな事、思ってたりにして
おかしいですね。こんなおばさんが

夢見たいな事思つて生きてる

でもね、夢を見なきゃ生きれなくて・・・
夢ぐらい見てもいいかなつて
それぐらい許してもらえるかなつて
『

永久

しばらく沈黙があり・・・

薫

『すいません、長々とついつい話すぎました。
だから、私あなたと共に歩けません。
本当にこんな私にありがとうございます。
本当にありがとうございます。』

恵太

涙があふれて止まらない

薫

『・・・私そろそろいきますね。

ました

恵課長さん、楽しい一時を本当にありがとうございます。
恵課長さんならきつと、すぐ課長さんになれますよ。
だって私にはずっと課長さんでしたよ、そしてこれ

からも』

恵太

『・・・』

薫

『では、お元気で・・・』

恵太

涙で引き止めることができない

そんな時薫が躓きかける

薫も震えていたから。ドキドキしていた。
こんな自分を好いてくれる人がいたこと、
それより何より、恵太と別れて以来誰にも話してこな

かった

過去を人に話した事、そして自分自身でも今の気持ちを言葉に出すことで、自分の隠していた思いが溢れて止まらなかった

いるはずのない恵太に会いたくなつた
封印してきた思いが溢れて薫の気持ちを足をはやらせたのだった

そんな薫を恵太が受け止める

薫
『……あり』

恵太
『……気をつけてくださいね。薫さんらしくもない』

薫
『……めぐみ課長……（小声で）』

恵太
『……？薫さん？』

薫
『めぐみ……恵ちゃん？』

恵太
『……か、お、る？どうして？』

薫
『けいちゃんっ……』

我慢していた涙があふれて止まらない

手で恵太を触る、始めはその手から
そして、恵太の顔を確かめるように触る

手を覚えていた

ていた

感覚が覚えていた
手のぬくもりを、大きな手を、力強い感覚を
恵ちゃんのを感覚を 目は見えなくても体が感覚が覚え
恵ちゃん、声がかれていたからわからなかったよ
シャンプーも昔と変えたんだね
わからなかったよ
けいちゃんけいちゃん、本当に恵ちゃん
夢じゃないんだ

薫

『恵ちゃんだったの？
恵ちゃんだったの？
ずっと恵ちゃんだったの・・・』

恵太

『かおる、そうだよ』

薫

『恵ちゃん・・・傍にいたんだね』

恵太

『かおる』

薫

『恵ちゃん、恵ちゃん、
・・・ごめんなさい。
恵ちゃんごめんなさい。恵ちゃん・・・
(声にならない)』

恵太

『かおる・・・
薫の気持ち初めてちゃんとやってくれたね。
ごめんね薫。寂しかったね薫
僕のせいだったんだね、ごめんね薫、
薫の手を離してごめんね 本当に一人寂しかったね

薫

よく頑張ったね薫 本当によく頑張ったね
(恵太の癖の髪をくしゃくしゃする)

『恵ちゃんだね。本当に恵ちゃん』

静かに時が流れ、二人手をつないだまま歩いていく

恵太

『薫、ただいま』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7540j/>

その手のぬくもりを

2010年10月21日20時19分発行